
虚像【男の想夢】

蒼城雪紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚像【男の想夢】

【Nコード】

N5336P

【作者名】

蒼城雪紫

【あらすじ】

お互いを想いすぎてすれ違ってしまった男女の話の男視点。

（前書き）

悲恋・死ネタで、狂愛にも取れる内容です。苦手な方はご注意ください。

嗚呼、なんて幸せな日々なのだろう。私がいて、君がいて。私たちは共に暮らしていて。君はいつも私の傍にいて。私だけに微笑んでくれる。

どれだけこの病の発作が苦しくとも。どれだけ血を吐いたとしても。この身体が死に向かおうとしていたとしても。それを食い止めるために、どれだけ苦痛を味わおうとも。今の私は、生きていたいと思う。

この日々は、ひどく幸せすぎる。だから、その代償なのだ。私に不治の病にでもならなければ、こうして君といられることもないのだから。

気がつくと、君はいつも空を見ている。陽の光を浴びて、どこか遠くを見ている。その瞳に私以外のものを映させたくない、と思うのは私の勝手な独占欲のせいだ。だから、私はいつも君の隣に座る。そうすれば君はいつも私に気がついてくれる。慌てた顔して、私を心配してくれる。

「無理なさらないでください！　ただでさえ貴方様は体力が衰えているというのに……」

「大丈夫だ。寝てばかりでは、さすがにつまらない」

君が私をそうやって心配してくれるのは、私が患者だからだろうか。別にそれでも構わない。彼女が私を気にしてくれている。それだけでも、私は幸せだ。

君はまた、空を見上げた。

「お前はなぜいつも空を見ているのだ？」

「お日様の光が、好きだからです」

お日様の光は、すごく優しい感じがするから。

君はそう続けた。私が見た、君の表情はとても優しくであった。だが、どこか悲しみを帯びているようにも見える。最近、彼女はこの表情を見せることが時々ある。

何故、君はそんなに優しく微笑んでいるのだろうか。その瞳には空や太陽ではなく、別の何かを見ているのだろうか。傍には私がいるというのに、君は別の誰かのことを考えているのだろうか。

何故、君は悲しみを隠しているのだろうか。私に心配をかけないためだろうか。それならいつそ、私にその悲しみを分けてくれた方が私は嬉しいというのに。それで君の気が済むなら、君の役に立てるのなら私はそれを喜んでやるというのに。

それとも、私とこの地にすることが苦痛なのだろうか。君は誰か想い人がいて、私を世話するためにここにいるせいで、その想い人と会えないことが悲しいのだろうか。だとしたら、君を悲しませているのは私ということか。たとえ私にとってこの日々が幸せであるうとも、君にとっては苦痛なのだろうか。私が君を縛りつけているから、君は悲しいのだろうか。

私は普通の人よりも少し身分が高いだけの武士の家の生まれで、今となつては薬で命を繋ぎ止める、いつ死んでもおかしくない不治の病の患者。君は昔から私を診察してくれていた診療所の娘で、その後を継いだ医者。たったそれだけの関係だったはずなのに、君は今、こうして人里離れたこの家で私の世話を焼いてくれている。そのためだけに、私と暮らしてくれている。こういう形になったのは、ほかならぬ君の申し出がきっかけだった。

* * *

「屋敷を離れ、人里からも離れ、君と二人で暮らすのか」
「そうです」

君がそのことを話したのは、いつもどおり診察をしてもらうために屋敷まで出向いてもらったある日のことだった。私の部屋には私と君しかいなかった。他の人間を入れたくなくて、私がそういう風に屋敷の人間に行つたから、だったか。

「貴方様の病は、不治の病です。そして、その病は他の人間にもうつるかもしれない病です。この屋敷で貴方の世話をさせ、他の方々と暮らしていれば、その方々にも病がうつるかもしれません」

「確かに、そうだな。他人とは極力接触せぬようにしていても、やはり限界がある。世話をさせている者たちはまだいいとして、それを通して兄上たちに病がうつるのはさすがに困るな」

この屋敷には私以外に私の世話をする者たち、そして私の兄と私の家族が暮らしていた。本来であれば、私はこの屋敷から出ていく立場であるが、私の病を案じた兄上は快く私をこの屋敷に置いてくれていた。兄上は、昔から優しい方だ。

「しかし、それでは君に迷惑がかかるだろう」

「何を言っているのですか。私は昔から貴方を診ております。病がうつる可能性ならずと昔からありますし。医者の仕事も貴方様が不治の病になられてからは貴方様の診察しかしておりませんから、支障はありません」

そう言つて、君はいつものように微笑んだ。君はただ、医者として最善の方法を考え、それを実行しただけであろう。しかし、その

時の私には君が私のためだけに尽くしているように感じられて、どこか満たされていた。そして、君を独占できることに満足していた。だから、君の気持ちなど考えず、君の申し出を素直に聞き入れた。

* * *

あれからどれくらいの時が経ったのだろう。それから君は、私とここでずっと暮らしている。君が人里に行くのは、ほんのわずかな機会しかない。眠りから覚めれば君が『おはようございます』と笑顔を向けてくれて、朝を迎える。ずっと寝込んでいる私の横には、いつも君がいる。眠りにつく前には君が『おやすみなさい』とまた笑顔を向けてくれ、私はそのまま眠りに落ちる。一日中、君は私につきつきり。どんなときでも、私の傍にいる。私にとってみれば、これほどの幸せはない。

しかし、それは君の悲しみで成り立っているのかもしれない。君が誰かに会いたいという気持ちを押し殺してくれているから、君は私の傍にいてくれているのかもしれない。君の自由を奪っているから、私はこんなにも幸せなのかもしれない。

空を見上げる君を見ると、少し胸が締め付けられる。昔は誰よりも君の幸せを願っていたはずの私は、いつしか君の幸せを奪う立場にいた。こんな矛盾を生んだ私は、自分自身を笑いたくなった。

私が死ねば、君は解放されるのだろうか。私の世話をする必要もなく、この地に留まる必要もなくなる。そうしたら、君は自由になれるのだろうか。幸せになれるのだろうか。

この幸せな日々が続いて欲しい。生き続けたいと願う反面、君のために『死にたい』とも思えてしまう。こう思ったのは、初めての

ことではない。ここ最近は、こんなことを何度も思う。君を見るたびに。

「……どうか、なされたのですか？」

隣に座ったまま、何も話そうとしない私を不思議に思ったのか、君は私に声をかける。少し首をかしげて私を心配してくれるその声も仕草も、愛おしく感じる。

「なんでもない。気にするな」

「いえ、今の表情はなんでもないような感じでした。何を考えておられたのですか？」

「……教えなくてはいけないか？」

「教えてほしいから、聞いたのです。聞かない方がよろしいのなら、いいですが……」

「……この世で一番愛しく想う人のことを、考えていた」

それは他ならぬ、君のこと。

「そうですか……貴方様に想われている方なのですから、とても素敵な方なのでしょうね」

「ああ、この世で一番美しい女性だ。その姿も、心も」

陽を見る姿も、その笑顔も、心配そうな表情も、嬉しそうな声も、私をとらえるその瞳も。医者として私を気遣ってくれるその心も。全てが愛おしい。君のためなら、私は死んでもいい。

「本当にその方を想っていらっしゃるのですね」
「だが、幸せにはしてやれていない」

私が幸せになっているだけで、君はきつと幸せではないのだろう。私は男であるのに、好いている人間を幸せにもしてやれないというのがもどかしい。私が不治の病にならなければ違っていたのだろうか。いや、そうなれば私と君の接点はほとんどなくなってしまう。命を奪う武士と、命を救う医者。あまりに正反对だ。どちらにしろ、生まれた時から私は君を幸せにはできないような立場であったのだと思う。

「貴方様のような素敵な方にそれだけ想われているだけで、その方は幸せだと思います」

「はたして、そうなのだろうか」

「少なくとも、私はそう思います」

君は知らないだろう。私の想い人が、君であることを。知らないからこそ、そんな優しい表情でそんなことを言うのだろう。それでも、嬉しかった。その表情がまた、愛おしく感じた。

君を幸せにするには、どうしたらいいのだろう。その答えは、自分の中ですぐに出てきた。

だから、私は一つの選択をした。

* * *

いつもと変わらないはずの、とある夜。君が私から目を離れた隙に、私は部屋にある自分の小太刀に手を伸ばした。この地に来てから一度も触れていないせいか、それに触れた瞬間何か違和感を覚えた。鞘からゆっくりと引き抜くと、それは鈍い光を放って目に映る。

手入れはほとんどしていなかったが、何故か錆びてはいなかった。そういけば、この小太刀はまだ一度も使っていなかったことを思い出す。

小太刀を自分の方に向けようとした時、さきほど感じた違和感をまた感じる。そうして、私は自分の身体の異変に気がついた。自分の思ったとおりに動いてくれないのだ。小太刀を持っている右手は、自然と震えている。この身体は、病のせいかな今までほとんど動いていなかったせいかな。とても弱り果てていたのだった。自分の身体が自分のものでない感じがした。手に力が入らない。これでは、自分に突き刺したとしても、死ねる気がしない。

困り果てていた、その時。何かが落ちたような音と、水音がした。音のなったほうを見れば、そこには泣きそうな顔をした君がいた。先ほどの音は、君が手にしていた水を入れた桶が落ちたのだろうか。君の足元は濡れ、桶が近くに転がっていた。

「何を、なさっているんですか……ッ！」

私のやろうとしていたことに気がついたのだろう。君はすぐさま私の方にやってきて、私の手に自分の手を重ねた。もう涙が流れるのではないかと思うほど、その目には涙が溜まっていた。

「怪我でもなさったらどうするのですか！ とにかく、早く刀をおさめてください！」

私のために泣いてくれる。それだけで、嬉しくなる自分がいた。私が死んだら、君は悲しんでくれるのだろうか。私の名を口にして、嘆き、後悔してくれるのだろうか。私が死してなお、君は私のことを考えてくれるのだろうか。もしそうしてくれるなら、私はそれだけで満たされるだろう。

そのとき自分の中に、狂った感情が生まれたのを自覚した。

「これ以上貴方様が傷ついたら、私……」

そう言つて、君は俯いた。君のすすり泣く声が聞こえる。涙がぽたぽたと落ちて、わずかに布団を濡らしていた。私はそんな君の名を口にする。すると、君は顔を上げて私を見つめた。

「お前に頼みがある」

「頼み、ですか……？」

「ああ」

私はずっと、君に小太刀を差し出す。すると君は目を見開いて、驚いた様子を見せた。だが、その瞳は私が言おうとすることをなんとなくは理解しているようにも感じられた。それでも、私はあえて口にする。

「私を、殺してくれ」

私の言葉を聞いた君は、先ほどよりも目を見開いていた。理解はできていても、その言葉を実際に聞くとやはりまた驚いてしまうのだろう。

「このまま生きていても死んでいるのと同じだ。なら、いつこの苦痛から解放されたい」

そんな言葉は、嘘だ。今の私の生活は、十分すぎるほどに幸せだ。病の苦痛など、微塵にも感じさせないほどに。

だが、こういえばきつと君は私を殺してくれるだろうから、私は自分の本当の気持ちとは正反対のことを言う。すると、君は震えた手で小太刀を握った。同じ震えた手でも、私が自ら自分を刺すより

は死ぬ確率が高いだろう。

君は、また俯いた。身体が震えているのがわかる。

「もうしわけ……申し訳、ありません……っ」

何故、君は謝るのだろう。謝らなくてはいけないのは私の方なのに。私のせいで、君はこの地に留まることになった。君の幸せを奪った。私は、罪深い男だ。

「何故、謝る。謝らねばならないのは私の方だ」

頭に浮かんだ言葉の全ては口にしなかった。

「違う……違うのです！」

何が違うのだろう。それはわからなかった。だが、君はきっと、罪の意識にかられているのだろう。自分のせいで、私が死を望むようになったと思ひ込んでいるのだろう。そんな君を見て、私は気がついたのだ。

君を私から解放するため。

そんなのは、本当は嘘だったのだ。こうすれば、きっといつまでも君は私のことを考えてくれるようになるだろう。君は優しいから私は死してなお、君を支配できる。狂っていると言われても構わない。それで、君に想ってもらえるのなら。

君は俯きながら、私に刀を向けた。

君を愛していた。ずっと、昔から。最後に伝えるつもりはない。言ってしまうのは何かもつたない気がした。

そうだ、こうしよう。

もし私たちが、もっと平和で自由な時代に生まれ変わったら。その時、まだ私が君への想いを忘れることがなかったなら。その時は、

君にこの想いを伝えよう。君が私を忘れてしまっていていい。君を探し出して、私だけしか見れないようにするまでだ。今はこんな狂ったやり方でしか君を捕まえることができないけれど、来世では素直に君に伝えたい。

だからこの想いは、今は言わないでおこう。

さようなら。愛し君。今まで、ありがとう。

貴方様を、愛しておりました。

意識が遠のいていく中聞こえた言葉は、幻聴だったのだろうか。

（後書き）

初投稿作品。他サイトに掲載したことのある作品なので、読んだことのある方もいる、かもしれない、ですね……。この作品の時代は具体的には決めています、戦国〜幕末の武士のいた時代をイメージしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336p/>

虚像【男の想夢】

2010年12月16日21時58分発行